

番組をお届けしたのか実体験を語っていただきました。

講演の五番目は、熊本日日新聞社編集局文化生活部長の高本文明氏から「熊本地震報道 伝えたい救いたい」と題して、被災者の命と健康を守るために報道が果たすべき役割の大きさを痛感し、エコノミークラス症候群をはじめ、地震後に起こりやすい病気の予防啓発や、心のケアなどを取り上げた熊日の紙面を中心にお話しいただきました。

講演の六番目は、熊本市民病院首席診療部長・神経内科部長の橋本洋一郎先生から「大災害時の脳卒中予防」と題して、大災害によって生活習慣病の進展が加速することが分かってきています。「復興には、まず健康」です。日頃の健康管理で脳卒中を予防することについて講演をいただきました。

約三〇〇人の来場者があり、内容を、五月三十一日の熊本日日新聞紙面に掲載しました。

なお、平成二十九年度開催しました三回の市民公開セミナー（第六十一回〜第六十三回）及び臨時（特別版）セミナーにつきましましては、本財団のホームページにも掲載しました。

総合生活情報紙「あれんじ」の健康・医学・医療・学術記事の執筆・監修

副理事長 山本 哲郎

平成二十九年度も、熊本日日新聞社発行の総合情報紙「あれんじ」（タブロイド判十六頁三十五万部発行）の第一土曜日分の十面と十一面の見開き二頁について執筆・監修を行い、健康・医学・医療の学術情報を県民に提供しました。内容としては、「元気の処方箋」（最新の医学医療記事）と「子育て応援クリニック」（小児科関連の医学医療記事）（十面）は、十二回（毎月）、「慈愛の心・医心伝心」（女性医療人によるリレーエッセイ）（十一面）を八回（五、六、八、九、十一、十二、二、三月）掲載いたしました。また、「四季の風」（季節の新作俳句）（十一面）を四回（四、七、十、一月）掲載いたしました。

なお、これらの全ての記事を「肥後医育振興会」のホームページに転載しております。どなたでも自由に読めるようになっています。「慈愛の心・医心伝心」などは読者からの読後感想が毎回のよう熊本日新聞社に寄せられている様子です。ので、皆様、ぜひホームページもご覧下さいませ。

以下に「元気の処方箋」のテーマを記載します。

- 四月 治療の幅が広がってきた肺がん 「頭痛持ち」になりたくない!

六月 頭痛のタイプを正しく知ろう 二〇三〇年には一〇〇万人を突破する!? 心房細動とはなにかな?

七月 行く前に学ぼう! 海外旅行の健康管理 Lesson

八月 正しい診断と治療で、完治を!! 足白癬(水虫)

九月 痛みを起さぬ体になろう! 家庭でできるエクササイズ

十月 痛みを起さぬ体になろう! 家庭でできるエクササイズ

十一月 女性や小児、高齢者に多い 膀胱炎と腎盂腎炎

十二月 頑固な便秘には理由がある!! 改善しよう! 慢性便秘症

一月 治療の選択肢増えた花粉症 気のせい? 病気? 目の周りや顔のけいれん

二月 子どもの精神面、行動面の問題について 成長・発達の過程で気を付けたいこと

三月

「第八回熊本県医療人育成総合会議」の開催

常任理事(事業担当) 遠藤 文夫

「熊本県医療人育成総合会議」の趣旨は、日本の医療需要がピークを迎えると共に六十五歳以上の高齢者が総人口の三分の一を占めるようになる二〇三〇年に

向けて、熊本における医療の能力をいかにして高めていくかを、医療界・医育界をあげて知恵を出し合っているというもので、八年前にこの事業を開始しました。

全人口は減少に転じている中で高齢者数は毎月五万人ずつ増加中であるということ。超高齢社会の到来は八年前の予測より早まりそうな感じさえあります。

その一方で、少子化の波が労働年齢人口の減少をもたらすに至っています。このことから、医療や介護に携われる人員の増加が難しいことに加えて、それらの事業に充てる予算もひっ迫していくことが予想されています。

このような困難な近未来の状況を克服する手立てとして打ち出されているのが「地域包括ケアシステム」事業です。しかし、その具体的な内容の設計が、地域の実情に合わせるように個々の地域に任されていることもあって、医療界や医療人育成機関においてもこの事業への理解が進んでいないのが実情にあり、熊本の未来の医療人にこの事業を紹介し理解を促す手立てを医育機関は考える必要があると考え、それを平成二十九年度のテーマとしました。

実行委員・遠藤文夫(実行委員長)、入

- 江徹美、宇佐美しおり、尾池雄一、河野文夫、木原信市、迫田芳生、辻野智二、齋田和孝、古川 昇、松下修三、山本哲郎、